

論文

介護実習理解度に影響を及ぼす要因の解析

菊池 小百合 (佐久大学信州短期大学部)

The analysis of the factor that has an impact upon the understanding level of care provider training

Sayuri Kikuchi (Department of Shinshu Junior College at Saku University.)

Abstract:The objective is to obtain the hint on the teaching method which improves the students' understanding level of the first-phase nursing training. I have analyzed the relations between each factor and the students' understanding level by mathematical quantification theory class 1, and each factor consists of ① sex, ② "understanding of dementia and nursing care," ③ the situation of absence, ④ the first training at the nursing home.

As a result, it is evident that the results of regular exams are the factors which have an impact upon the students' understanding level of nursing training. It is suggested that the individual support for each student in lectures on campus is necessary to improve the students' understanding level of nursing training.

Keywords:training at the nursing home, understanding level, factor, individual support, mathematical quantification theory

I . はじめに

介護福祉士養成課程における介護実習は、資格取得の必須条件であり、学内で学んだ専門的知識とケア場面の体験をとおして、知識と技術を統合させ、介護福祉士としての専門性を培う貴重な場である。特に第1段階介護実習は、初めて介護現場を体験することによる不安と緊張の中で行われるが、一方でその体験は、その後の学習に対する基盤となるといえる。

介護実習は履修科目として1年次前期より授業が開始され、「介護総合演習」と「介護実習」の連動によって習得される。教育目標は、①「学習の3領域（介護・人間と社会・こころとからだのしくみ）」で習得した、介護福祉士に必要な倫理と態度、知識と技術の統合を図る。②実習目標（課題）の設定、実践、実践の振り返りと評価、実習目標の設定という、一連の流れを通し、判断力や問題解決能力、自己評価力を高める。③実習における体験の意味づけを行い、個別ケアのあり方を学ぶとともに、自己の介護観や課題を明確にする⁽¹⁾ことである。

また介護実習場所は認知症対応型共同生活介護、障害者支援施設において実施されることから、介護総合演習の講義のほか、関連知識として「認知症の理解と介護」「生活支援技術障害編」の学習が必要とされる。

本稿においては、第1段階介護実習における理解度に影響を及ぼす要因を明らかにし、介護福祉士としての専

門的知識と技術の修得を目指した、より効果的な教授方法の示唆を得ることを目的とする。

II . 用語の定義

本稿における実習理解度とは、第1クール、第2クール実習終了後のアンケート内容から、「施設の理解」「利用者の理解」「利用者を取り巻く環境の理解」「ケア職種の役割の理解」を学習内容とし、さらに「今後の目標に対する具体性」を課題克服とし、それぞれの記述内容を精査のうえ評価点数を設け、「学習内容の評点+課題克服の評点」を総計し、平均した値を「実習理解度」とした。

III . 研究方法

第1段階介護実習前の学内講義「認知症の理解と介護I」および「生活支援技術障害編I」の総合評価と、実習終了後のアンケート調査内容、第1段階介護実習総合評価をもとに、数量化1類により統計処理を行い、実習理解度に最も影響を及ぼす要因を求めた。

1. 対象

本研究に対し協力が得られた、A短期大学部介護福祉学科（以下A学とする）1年次生32名

2. 対象実習の概要

第 1 段階介護実習

第 1 クール：平成 26 年 11 月 11 日～11 月 18 日までの 6 日間

第 2 クール：平成 26 年 11 月 20 日～11 月 28 日までの 6 日間

第 1 クール、第 2 クールに分かれ認知症対応型共同生活介護（以下グループホームとする）、障害者支援施設実習を交互に行った。

3. 論理的配慮

本研究を行うにあたり、本学の倫理規定に基づき、対象学生に対し研究の趣旨を説明、個人が特定されないよう統計的に処理を行うと共に、成績及び第 1 段階介護実習評価に影響しない旨を文書、口頭にて説明し許可を得た。

4. 実習に対する理解度の評価

第 1 クール、第 2 クール実習終了後のアンケート内容「第 1 段階施設実習および実習施設について学んだ事・感じたこと」「今回の実習の課題と今後の実習に向けての抱負」を精査し、①学習内容の理解度（以下、学習内容とする）、②課題克服に向けた抱負（以下、課題克服とする）の観点から評価した。具体的には、実習第 1 クールと第 2 クールにおける「学習内容の評点+課題克服の評点」を総計し、平均した値を「理解度」とした。その際、各評点は以下の基準で付与した。

〈学習内容の評点〉

アンケート内容における学習の視点と内容の明確性および具体性から判定。

100：明確かつ具体的である。

75：一部に不明確あるいは曖昧な部分がある。

50：全体的に不明確あるいは曖昧である。

〈課題克服の評点〉

アンケート内容における課題把握と対策の明確性および具体性から判定。

100：明確かつ具体的である。

75：一部に不明確あるいは曖昧な部分がある。

50：全体的に不明確あるいは曖昧である。

5. 実習の理解度に影響を及ぼす要因の解

「理解度」に及ぼす要因として、①性別、②定期試験の成績、③欠席状況、④初回の実習先を選定した。さら

に、各要因と理解度との関係を数量化 1 類によって解析した。その理由は、説明変数（①-④の要因）の中に量的データだけでなく、質的データが含まれること、おのおのの要因をカテゴリー化することにより、目的変数（理解度）への影響度合いが考察できるためである。すなわち、数量化 1 類は、説明変数が量的変数として与えられる重回帰分析に相当し、「説明変数」が「アイテム」、「変数」が「カテゴリー」として示される。数量化 1 類の解析は、福井・細川（2015）が開発した College Analysis Ver.5.4 (<http://www.heisei-u.ac.jp>) を用いて行った。解析の際に用いたアイテムのカテゴリー分類は表 1 の通りである。

6. 実習の理解度と総合評価との関係

実習の総合評価は第 1 クールと第 2 クールにおける実習の状況から、以下の視点で判定した。

総合評価は「優・良・可」によって判定されるため、ダミー変数としてそれぞれに「1,2,3」を割り振り、実習の理解度と総合評価との関係は両者の順位相関から判断した。

IV. 結果

1. 理解度に影響を及ぼす要因

表 1. 要因解析に用いたアイテムとカテゴリー分類

アイテム	カテゴリー
性別	1: 女 2: 男
定期試験の成績	1: 優 (当該2講座の成績の組み合わせ→優・優) 2: 良 (当該2講座の成績の組み合わせ→優・良、優・可、良・良) 3: 可 (当該2講座の成績の組み合わせ→良・可)
欠席状況	1: 当該2講座の欠席日数合計→0日 2: 当該2講座の欠席日数合計→6日未満 3: 当該2講座の欠席日数合計→6日以上
初回の実習先	1: 認知症グループホーム 2: 障害者支援施設

※当該2講座：「認知症の理解と介護Ⅰ」および「生活支援技術障害編Ⅰ」

数量化 1 類による解析結果を表 2 に示す。得られたモデルの重相関係数は 0.622 であり、モデルの有効性を示す F 値は 2.636 (F 分布を仮定した参考 P 値 0.04) であった。すなわち、本モデルは「理解度」の説明に対して一定の精度を有していると判断された。

実習の「理解度」に及ぼす影響の大きさは、各アイテ

V. 考察

ムのレンジおよび偏相関係数の大きさ（値の大きいアイテムほど影響も大きい）から推定できる。本モデルの場合、定期試験の結果＞欠席状況＞初回実習先＞性別の順であった。さらに、重要性を示すF値から判断すると、「理解度」に明らかに影響を及ぼしているアイテムは「定期試験の結果」と判定された。そこで「定期試験の成績」についてカテゴリウエイトの分布をみると、成績が「可」の場合に符号がマイナスとなることから、成績不良は実習に対する理解度も低くなる傾向にあることが明らかとなった。

表2. 実習の理解度に影響を及ぼす要因

アイテム	カテゴリ	度数	カテゴリウエイト	レンジ	偏相関係数	重要性F値 (参考P値)
性別	女	21	-0.104	0.301	0.013	0.004 (0.951)
	男	11	0.198			
定期試験の成績	優	10	0.589	22.569	0.603	6.961 (0.004)
	良	11	8.965			
	可	11	-13.604			
欠席状況	なし	16	2.791	17.385	0.383	2.128 (0.140)
	6日未満	13	-0.067			
	6日以上	3	-14.594			
初回の実習先	認知グループホーム	15	-1.504	2.831	0.118	0.331 (0.570)
	障害者支援施設	17	1.327			
定数項		83.984				

※モデルの重相関係数：0.623、寄与率：0.388

2. 実習の理解度と総合評価との関係

実習の理解度と総合評価との関係を図1に示す。両者における Spearman の順位相関係数は $r_s = -0.118$ であり、有意な関係は認められなかった。

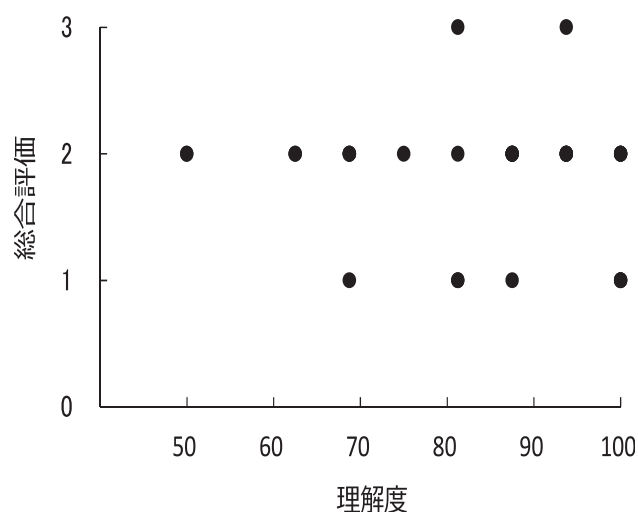


図1. 実習の理解度と総合評価との関係

1. 実習理解度に影響を及ぼす要因

解析結果より、欠席状況、初回実習先、性別に関しては明らかな相関は認められず、定期試験の総合評価がその後の介護実習に最も大きな影響を及ぼすことが明らかとなった。

第1段階介護実習においては、「養成校の年間実習計画策定の指針となる厚生労働省ガイドライン」によって、コミュニケーション関係が比較的可能な障害者施設と老人施設とされており、A学では、「利用者の生活の場である多様な介護現場を体験し、利用者与人間的触れ合いを通じて利用者の介護ニーズと介護の機能並びに施設職員の役割について学ぶ」を目的に、グループホームと障害者施設それぞれ6日間の介護実習が行われている。

介護実習場所を選定するにあたり、初回実習先に関しては、過去の学生の感想から障害者施設実習が初回となる場合、環境になじまず緊張感を抱いたまま終了するのではないかといった危惧があったが、本研究において初回実習場所は実習理解度に影響を及ぼさないことが明らかとなった。

最も影響が大きい定期試験結果に関しては、介護実習開始前に個々の学生の「認知症の理解と介護」「生活支援技術障害編」に対する理解の程度を再確認し、その状況に応じて補足する事が必要であると考えられる。

確認する方法として、課題提出による記述内容の把握、小テスト実施による知識の習得状況の把握などが挙げられる。テストによる成績評価に関しては、学生自身が復習をし、学んだことを整理する機会、学生が自分の理解度を確認するための機会、学生がさらに学ぶ動機を獲得する機会とする⁽²⁾ことが重要であると言われており、教員が個々の学生の理解状況を確認するのみでなく、学生自身の知識習得に対する意欲を高める事を目的に行う必要がある。

課題提出に関しては、学生が自身で考え表現する力を身につける事が重要である。本調査によるアンケート内容の記述から、表現方法の不明確さ及び曖昧さが認められた。記述に関する具体的方法、論理的に事象を考える事が可能となるよう、学生に対し考える視点を明確に提示する事が必要であると言える。

小テストの適時実施と課題提出により、個々の学生の理解の程度を客観的に把握し、補足授業を含めた個別支援を行うなど、日常的な取り組みを行う事の重要性が示唆された。

2. 実習理解度と総合評価との関連

実習理解度と介護実習総合評価との関連に関しては、明らかな相関が認められなかった。このことは、総合評価に影響を及ぼす要因が単純に「実習理解度」だけではないことを示している。

A 学では、第 1 段階介護実習の目標として「利用者との人間的な関わりを深めながら利用者を理解する。利用者・家族とのコミュニケーションの実践、他職種協働の実践、学内で学習した知識・技術を現場で体験学習することで、介護実践能力を身につける」としている。すなわち、実習の評価軸が「知識の確認」と「技術の習得」に加え「利用者、家族、職員との人間的な関わり」にもあるといえる。

本調査によるアンケートの記述内容をみると、「話ができない人が多くて大変だと思った」「コミュニケーションをとるのに苦労した」「自分の存在が利用者さんに知られていないと驚かせてしまったりすることを学んだ」など、コミュニケーションに苦慮したとの意見を述べる学生が散見された。その一方では「様々な行事を行い利用者の方とも職員の方とも早くなじむことができた」「実際に障害を持っている方々と接することで、マイナス部分が多いイメージだったが、優しくったり、気を使ってくれたりいい人が多いとわかった」「職員の連携がしっかりとれている事が分かった」などの意見もみられ、個々の学生によってコミュニケーション能力に差異が生じることが確認された。

こうした差異は総合評価にも大きな影響を及ぼしていると考えられ、「実習理解度」と「介護実習総合評価」との間に明瞭な関係が認められなかった要因の一つになっているものと推察される。

以上のことから、実習の目標を確実に達成するためには、実習に関連する知識の蓄積に加え、「障害や認知症を持つ人との関わり」、「職員との関わり」等、コミュニケーション能力向上に関する重点的な学習の必要性が示唆された。

3. 実習効果を高めるための方策

介護実習後のアンケート内容等から、実習理解度を高めるための示唆を得る事を目的に解析を試みた。その結果、定期試験結果と実習理解度との関係が明らかとなった。これらの結果から、第 1 段階介護実習の目標を確実に達成するためには、次に示す手順に沿って対応することが肝要と考えられる。

- ①学内講義における学生の理解度を試験やレポートを用いて把握する。
- ②定期試験において理解度が不十分と評価された場合は、補講等による個別的な支援を検討する。
- ③課題に対するレポートの作成では、具体的視点と到達目標を明示し、論理的な思考力及び文章表現力を培うように指導する。
- ④学生個々のコミュニケーション能力を把握するため、演習授業等を導入し、その向上に努める。
- ⑤実習に先立ち、その目的、評価軸を明確にし、評価者および被評価者の双方で確認する。
- ⑥実習の評価は、評価者および被評価者の双方で行い、結果についての妥当性と改善に向けた方向性を確認した後、総合評価を判定する。

4. おわりに

2006 年 12 月 12 日 社会保障審議会福祉部会から報告された「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」では、これからの介護福祉士の人材育成における目標として、「求められる介護福祉士像」12 項目⁽³⁾を以下のように整理している。

- ①尊厳を支えるケアの実践
- ②現場で必要とされる実践的能力
- ③自立支援を重視し、これからの介護ニーズ・政策にも対応できる
- ④施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力
- ⑤心理的・社会的支援の重視
- ⑥予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる
- ⑦他職種との協働によるチームケア
- ⑧一人でも基本的な対応ができる
- ⑨「個別ケア」の実践
- ⑩利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力
- ⑪関連領域の基本的な理解
- ⑫高い倫理性の保持

これらの目標を達成するためには、専門知識の獲得と介護現場における実践的活動が不可欠であり、「実習」はその模擬的訓練を行う貴重な機会となる。介護福祉士養成校が行う「実習」は、その意味でも重要であり、日々学生の視点にたった教授内容を検討する必要がある。

本稿では、「理解度」に関与すると考えられる 4 要因を用いた解析を行ったが、コミュニケーションに関する要因についての解析は行っていない。今後はそれらの要

因も加味したより多角的視点からの解析を行い、知識と実践が両立する人材育成に向けた改善を重ねていきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた A 短期大学部介護福祉学科 1 年次生の皆様に深く感謝を申し上げます。

【引用文献】

- (1) 峯尾武巳, 黒澤貞夫編著. 介護総合演習 実習をと
おした学びの目標と課題. 建帛社. 2014. 20-21.
- (2) 名古屋大学版ティーチングティップス Ver1.1 ; 成
長するティップス先生 Ver1.1.
www.cshe.nagoya-u.ac.jp 2015 年 3 月.
- (3) 介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関す
る意見. 社会保障審議会福祉部会.
2006 年 12 月 12 日.

【参考文献】

- (1) 社団法人日本介護福祉士会編. 現場に役立つ介護福
祉士実習の手引き. 環境新聞社. 2004.
- (2) 菱沼典子. 学生がコミュニケーション能力を育成で
きる環境を作る. 看護教育. Vol.53. No.10 .2012.